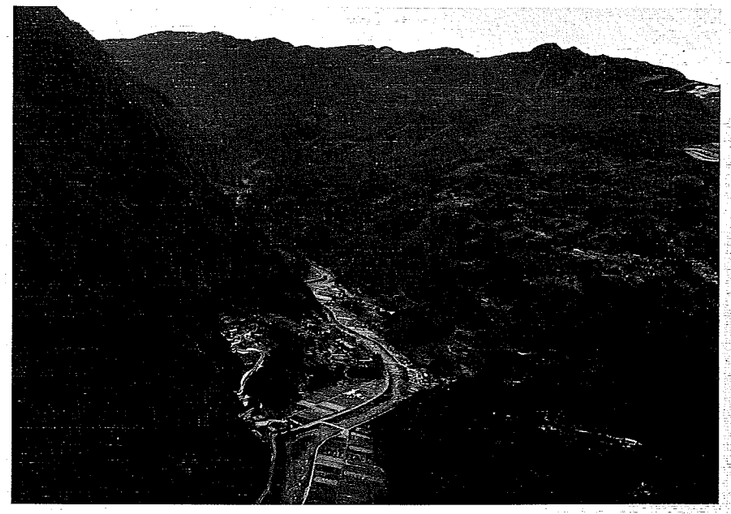


大災害からの記録
昭和36年梅雨前線集中豪雨から30年1961年～1991年

N364
オオ

大災害からの記録

昭和36年梅雨前線集中豪雨災害から30年

〔1961年 ～ 1991年〕

平成４年３月

下伊那郡大鹿村

飯田市立中央図書館
0113641054

寄贈本

36災30周年記念誌発行にあたって

大鹿村長
松尾幸久

大鹿村にとって昭和36年６月の伊那谷梅雨前線集中豪雨災害は全く言葉に現すことの出来ない惨状であり大鹿村は再起不能とまで言われた大災害であり、数部落の集団移住が過疎化の引き金にもなったとまで思われるのであります。しかし災害の復旧はそれぞれの上局関係者の熱心なお取り組みとご支援に依り現在に見る大鹿村が生れたのであります。それにいたしましても現実にその時を知る者にとっては奇跡的復旧と思われます。

想えばあの時から30年の歳月が経過したわけで、うたゝ感慨深いものがあります。当時を知る多くの村民があります故にこの記念小冊子を発行し薄れ行く記憶を呼びもどし亡くなった方々の霊を慰めたいと思います。

昨年は30周年の種々行事が行なわれましたがやはり大西山の大崩落であり、亡くなられた42名の犠牲者と鹿塩地区での13名でありこの事は遺族の方々は勿論関係者の忘れ得ぬ心の痛みと思います。多くの行事の中で特筆すべき事は多くの善意の方々のご努力に依って殉難慰霊観音像の建立完成であり亡くなられた皆さんも残されたご遺族、そして村民も救われた思いが致します。今後大切に祀って行くようにと考えております。関係された方々に心からなる謝意を申し上げます。

扨思い返せば６月23日頃から降り出したる雨は６月27日最高に達し将に篠つく雨との状況で先ず鹿塩川筋が氾濫して夜迄に人命だけでも13人が犠牲になり、人家田畑においては北川部落がほとんど全滅、奥沢井の流失、落合から西、塩川等流域の惨状は見る眼を持たずと言った処であります。

私事になりますが私の家も西部落の寺沢の山津波で流失いたしました。そんな事故に昨年は鼎文化会館での体験発表、また東京での発表会等、出席要請を受けて出させて頂き種々体験の発表とともに今後についての再び起きることのないお取り組みを要望いたしました。特に訴えたい事は私共の大鹿村が村の中央を南北に中央構造線の破砕帯が通っており交わるように仏像、三波川の破砕帯もあり急峻軟弱の地盤とあいまって非常な心配の種を持っており、このことが杞憂ですむよう治山、治水の処置の進渉を心からお願いするものであります。

こゝに忘れ得ぬ36災の30周年を迎えてこの小冊子発行にあたって今後あのような惨状を味わう事のないよう精一杯の取り組みを続けて行く事を肝に銘じるとともに災害犠牲者のご冥福を心こめて祈り村民の皆さんのご多幸を祈念して36災記念小冊子発行の御挨拶といたします。

飯田市立
中央図書館
蔵 27.1.30 書
第 号
受入

30年前の災害を顧みて

大鹿村議会議長

多　田　善　郎

昭和36年６月、伊那谷を襲った梅雨前線集中豪雨は、その規模においても激甚においても本県災害史上空前のものであると言われ当大鹿村も未曽有の大被害をこうむりました。思い起せば総被害額44億円余に達する有史以来の大災害であり、６月23日より続いた長雨で梅雨前線は益々発達し飽和状態な地質は29日の集中豪雨により一瞬にして大西山が大崩落を致し312万立方メートルに及ぶ土石流が小渋川をせき止め尊い人命や家屋を失い各河川の氾濫、田畑、橋梁の流失にて交通、通信が不能となり廃虚と化した現況をみた時、茫然自失の状態となり自然のなす業に身の毛のよだつ思いがしました。

幸いにも国・県を始め各関係機関の方々のご援助により又、村民の力強い復興意欲が結集をし幾多の困難をも克服し、たゆまざる努力と災害による爪痕も建設省、農林省の直轄工事の新しい工事技術により治山治水も治（おさま）り村の平和が蘇りました。その陰には災害で55柱の尊い生命が失われた人々の霊また祖先伝来住みなれた土地を離れた多くのご家族の皆様を永久に忘れ去る事ができません。しかし30年を経た今日あれほどの大災害でありながら人々の記憶は風化して、ともすれば忘れがちになり当時の面影すら失われつつあります。災害は忘れた頃にやって来るというが当時の大災害で会得した体験、生きるための生活の知恵、行政施策、災害復旧事業等重要な事を思い忘れる事は出来ません。30年を経た今日社会情勢も著しく変貌致しました。

中央道西の宮線の開通で都市と結ばれたる主要地方道として松川インター大鹿線も改良工事が着々と進み、また茅野磐田線も昭和50年に国道に昇格し改良が進み、三遠南信自動車道の開通にて静岡県三ケ日まで通じ高速時代を迎えます。

大西山の崩壊地も桜公園と化し村民の憩の場とし日本桜の100選の仲間入りが出来るまでになりました。

昨年は奇特な村内外の皆様のご遺族の願いにより大西観音像が建立でき、後世に語り継がれる事と思います。また建設省の親水公園、中央構造線博物館も着工の運びとなり村の明日が期待され再び災害のない事を念願し犠牲者のご冥福を祈ってやみません。

災害発生と被害の状況

1．災害発生の状況

26日午後５時警報が発せられ警戒態勢に入った消防団は、各分団ごとに配置についた。

27日午後に至り非常態勢・避難命令と、事態は緊急を告げて加速度的に悪化していった。

すなわち北川地区の水防犠牲者３名・北入の下平成一宅流失の報を最後に鹿塩地区内の連絡は完全に寸断された。

午後４時頃岩音橋が流失し、昨35年完成したばかりの堤防を乗り越えて奔流は中学校体育館に迫りつゝあった。午後２時に北川の状況視察に向った役場の[redacted]・[redacted]の両名は黒川附近で車を捨てゝ命がけで第５分団詰所まで脱出してきた。

同じ頃、突然に西の寺沢が押し出し、折柄同所にて水防作業中の[redacted]・[redacted]・[redacted]の３名を呑み込んで下平忍宅外数戸を破壊し、県道に小山を築いて奔流へ突入した。

５時半に至り鹿塩中学体育館を突破した濁流は風月堂を洗い始めた。

一方、桃の平の針ノ木沢が押し出して[redacted]宅が流失し、夜半には上ノ沢が洪水し[redacted]・[redacted]宅が埋没し、桃平橋は倒壊して[redacted]宅に迫った。

桶谷では午後11時頃[redacted]・[redacted]宅の流失を手始めに被害は拡大しつゝあったが、交通も電話も途絶し情報も不明となった。

午後８時頃塩川も急激に増水して塩湯附近の道路を壊滅し、河合橋を丘にして両岸をさらい、[redacted]・[redacted]・[redacted]の３家と[redacted]もまたゝく間に流失、[redacted]・[redacted]両名宅は危険に頻した。

さらに梅の木沢が崩落し[redacted]宅を一瞬にして倒壊し去り、[redacted]と同家に避難中の[redacted]一家４人、計６人の生命を奪った。なお学校下の[redacted]宅裏で堤防を超えた本流は市場通りに迫り、塩川公会堂・市場神社やその附近にある民家は避難者で一杯となり、農協並びに郵便局・治山事務所・担当区などの官舎の避難も次第に急となった。

文満では夜半に至り[redacted]・[redacted]他１戸が地辷りと土砂流失の為、倒壊埋没して附近一帯の民家をは避難をした。

桐久保沢は刻々と増水して消防団必死の防災にかゝわらず高橋竜文別宅は埋没決壊の危険に頻したので、上下市場一帯は[redacted]家へ避難する状況となった。

鹿塩地区での情況は一層険悪を極め、教員住宅２戸を流失し、[redacted]別宅は倒壊寸前となり、学校附近の民家は公民館・学校へ避難するに至った。

午後11時頃塩川の[redacted]宅が附近の小沢の押し出しで危険となり、その下流の[redacted]宅へも土砂が押し入り、[redacted]宅は瞬時に倒壊し奥で寝ていた子供は無事外に脱出したが、勝手に起きていた同人は泥水に巻き込まれ、助けようとした妻の眼前で泥中に没して行った。なおまた西の寺沢が一大轟（ごう）音と共に流失し[redacted]・[redacted]・[redacted]・[redacted]・[redacted]及び半壊であった[redacted]の４家を完全に埋没して県道から水田へかけて巨大な山丘を築き上げてしまった。

急は踵を接すれど頼むに人なく報知するに術（すべ）なく既に夜半に達した。耳についた半鐘の音も消え、ただただ四山を洗い流す猛烈な風雨の音と濁流に流れる巨石と不気味な地響、遠く山の崩れ落つ音、その間を短く叫んで松明（たいまつ）が走り、決死的な救出作業が続けられていった。

午前零時前後に至り決死で固めた水防線を突破した濁流は、鹿塩農協利用部附近から市場通り目がけてとうとう突入し、第５分団本部を始め附近に取り残された人々はロープをつたって救出された。今は早や施す術もなく、たゞ夜明けを待つのみで絶望と恐怖の時を過ごした。

28日午前３時頃、西の[redacted]宅は裏山が崩落し奥で就寝中の老母（86歳）は生き埋めとなったが家族に救出され、[redacted]及び[redacted]別宅も急流に没していった。

大栗では午前４時頃[redacted]・[redacted]両家が裏山の崩落で全壊し、[redacted]・[redacted]両家は

大萱沢氾濫で浸水し、鹿塩川にさらわれた[redacted]家は転落寸前となった。

沢井分校は27日から30日に至るまで裏山から土砂が流入し、住宅・体育館・給食室と破壊埋没し、香林寺・[redacted]宅まで被害が及ぶに至った。

奥沢井では[redacted]・[redacted]・[redacted]の3家が流失全壊し、他の4戸は危険となったが情況は一切不明であった。

北入2地区では28日朝方氾濫した黒川が治山宿舎・農協支所などへ侵入し附近一帯を泥海とし[redacted]・[redacted]の2戸は埋没し、[redacted]宅は壊滅寸前となった。

北入分校は鹿塩川の本流が浸水し、附近の家屋は本流にさらわれて断崖上になり危険となった。

入沢井は至る所に地割れを生じ、また河原島橋を濁流が超えて附近一帯は危険となった。

青木では上唐沢の氾濫により、28日午前6時頃[redacted]・[redacted]・[redacted]・[redacted]・[redacted]の5戸が流失し、沢の決壊で[redacted]宅は埋没した。

落合地区は28日午前2時半駐在所上流から鹿塩川が突入し、[redacted]宅・中電住宅1棟・大協建設飯場が流失し、駐在所・[redacted]宅外数戸が流失寸前の様相を呈し、浸水半壊家屋20余戸となり、役場も油倉庫が流失し鹿塩川に洗われるまゝ危険な状態に至った。

29日午前3時頃塩原の[redacted]宅が流失し地割れを起こした塩原の大半は一時避難する。なお北入一の[redacted]・[redacted]両家も地辷りによる危険で避難した。（公民館報83号から掲載）

北川地区流失

36災害で真っ先に被害を受けた鹿塩川上流の北川部落は、住宅・家財・耕地を埋没流出し、全部落39戸は移住を余儀なきに至ったが、報道された当時の惨状は次のようである。（公民館報第83号登載のもの、原文のまま）

――集団キャンプ生活で、孤立の中の北川地区――

全滅と伝えられた北川地区は、見事な団結の力に支えられて230余人が生きぬいた。それは逆境と云う究極の中に。

27日午後1時、猛烈に降り注ぐ雨に各家庭では児童の迎えに分校へ集まった。1時半子供を連れて帰りに渡る学校の橋はゆれて落ちんばかりであり、堤防を本流が超えはじめる頃であった。

午後2時、危険となった東小花沢の橋梁の撤去を役場へ要請して作業にかかった。突然、鉄砲水は上の公民館を突破して[redacted]宅とこの場へ集まった人々へ襲いかかった。見張りの叫びも物凄い音にかき消されるばかりで瞬秒をあらそって待避したが、不幸にして上方へ走った[redacted]・[redacted]・[redacted]の三氏は濁流に捲き込まれて姿はなかった。人々は誰がいなくなったか、自分自身がどうしたかさえ判らなかったが、梁にすがって一人が流れるのを発見して救助しようと、50米余も後を追ったが、彼はかすかに手を振りつつ遂に泥流に没してしまった。

狂奔する鹿塩川はたちまち分校へ襲いかかり附近の人や先生はからくも裏山へ逃がれた。3時半、味噌震橋に土砂がつまり、木炭倉庫をはじめ、[redacted]・[redacted]・[redacted]の各氏宅は埋没していった。

4時頃、表山が崩落したため伊東錦司・中村正見氏宅が破壊流失し、5時半には大葉沢の氾濫により、[redacted]・[redacted]宅が完全に埋没、前田市恵氏宅が埋没する。

午後8時半溢れ出た本流により[redacted]宅が流埋没、11時頃に[redacted]宅が午前1時半頃[redacted]宅と分校が流失してしまった。

又地獄谷が27日午後6時頃物凄く押し出て附近一帯に拡がり、[redacted]・[redacted]氏宅が危険となり、[redacted]宅は裏山からの土砂により埋没し[redacted]宅が一部破壊され、[redacted]宅も危険となったため、附近の人々は[redacted]・[redacted]宅へ避難した。

さらに同日8時頃[redacted]宅、[redacted]宅が夜半に流失し、28日午前4時頃、[redacted]・[redacted]宅が、1時間後には[redacted]宅が流失し、[redacted]・[redacted]宅も土砂が流入し危険状態になった。

29日午前8時頃、[redacted]宅は鹿塩川に土台までさらわれてまさに流失の寸前、裏山が100立方米にわたってさながら百足が這い下る如くだくだくと崩落して助かったが、土砂は鹿塩川を10数分間も堰き止める大事故となった。

こうした事態の中で27日午後5時老人婦女子を山へ避難させ立木を倒したりひろい集めの材料でキャンプを張った。思えば半月余にわたる悲惨な生活が始まったのである。

槙立に32人、馬墓地に11人、手開きに36人、柄山に21人、不動蔓根に76人が孤立したまま連絡もとれず、濡れた身に着替もなく傘をさしたまま空腹を抱えて朝を迎えた。

不動蔓根では流れ残った家屋から釜と米を手に入れて炊き出しを始めた。小さなむすび2つが1日の食糧であった。また川向いには石をつけて紐を投げそれにロープを張って握り飯を届けたり、手真似で連絡を取って元気づけたり、味噌震に孤立した6人の決死的な救出にも成功した。

さらに避難途中、濁流に押し流された静岡県の[redacted]の救助も決死的であった。馬鹿になれ、先ず馬鹿になって集団生活を守れ、これがこの人達の申し合わせた言葉であった。

28日に連絡隊を編成して役場へ向ったが、黒川の氾濫で渡ることが出来ず、儀内路から食糧を分けてもらって帰った。

超えて30日、北入消防団が食糧を持って救助に見えた時は、唯感謝で胸が一杯であった。続いて鹿塩分室からの救助も届き、朝日新聞社のヘリコプターに[redacted]が医薬品を持って救出に同乗、飯塚氏を同ヘリで病院に収容し二便で米も到着し、漸くこの人たちへ救助の手が届いて行った。

大西山大崩落

29日朝、雨は一時小やみとなっていた。人々は連日の防災と不安に疲れ切った夜を明かし、互いの家屋の平穏を確かめ合ってほっとした一時であった。ある者は避難先から家に帰り、ある者は所用で出歩き、またある者は水田や河川の見回りに出ていた。

午前9時10分、突如として一大音響と共に、大西山平ナギ地籍の大崩落が起きた。

それは実に一瞬の「アッ」という間の出来事であった。

厚さ約15メートル、幅約500メートルの山塊は、およそ450メートルの高さから落下し、その風圧は一瞬の間に下市場・文満の家屋を倒壊し、崩落土砂は山津波となって、小渋の濁流と合せ、且つ塞ぎ、且つ乗り越え、耕地も家屋も人命も容赦なく押しつぶし、押しかぶせて、小山をつくって襲いかかった。

それは逃げるにも逃げる間もない出来事であった。

人々は懸命に走った、逃げ遅れた人々は土砂の下敷となった。走った者では100メートルとは走り得なかった。背後からは強風圧と、恐ろしい小渋の濁流がうずを巻いて迫った。

瞬時の強風圧で吹き飛ばされ倒壊した家屋で、圧死を遂げた人々、濁流の中で肉親の名を呼び、救いを求める声は、まさにこの世の地獄であったことは、時を経るに従って人々に伝えられた。

泥土の中から奇跡的に脱出した人々は、余りの恐怖に、力の限り只ひた走りに上へ上へと、少しでも安全な場所を求めて駆け上がった。

後には大鹿が誇った穀倉地帯島河原30町歩の美田もなく、下市場・文満の目抜き通りもなかった。

惨たる家屋倒壊の上に、突如として出現した小山は、高さ48メートル、幅500メートル、体積312万立方メートルと言われた。

崩落した土砂は松平神社と大河原小学校へ向って侵入し、校庭から体育館・階下各教室へとなだれこんだ。

およそ20分後に堰が切れると、水量が増した濁流はなおも人命・家屋・家財を呑んで奔流した。

42名の尊い人命と40戸の家屋・家財が失われた大悲惨事となった。

肉親を失った人々は、ごみ屑のように潰れ散った家屋の中から懸命に遺体の影を求めた。

消防団をはじめ附近の人々は、必死になって被災現場へ馳着け救出に当たった。

小止みだった雨も夕刻に至りてその量を増し、大西山は音を立てて崩壊を続け、[redacted]家・香松寺の避難先も危険と見てか、更に安全地帯を求めて、暗がりの雨の中を幾人かは出て行った。

この日から大河原中が恐怖のどん底に落ち入り、人々の顔から笑いが消えた。

（公民館報第83号「災害発生現況」から掲載）

2．被災状況一覧表

罹災総数	戸数		518
	世帯数		522
	人員		2,301
人的被害	死者		41
	行方不明		14
	負傷	重傷	21
		軽傷	600
家屋被害	全壊流失	戸数	118
		世帯数	122
		人員	453
	半壊	戸数	47
		世帯数	47
		人員	204
	床上浸水	戸数	52
		世帯数	52
		人員	234
	床下浸水	戸数	301
		世帯数	301
		人員	1,355
	非住家		38

被害種別	金額
	千円
公共土木施設	3,203,768
林道施設	16,023
山林荒廃地	500,000
農地	160,755
農業用施設	88,201
文教施設	14,900
住宅 全壊流失	173,920
半壊	32,900
床上浸水	26,500
床下浸水	60,200
非住家	4,319
農作物	49,024
畜産	5,035
林産物	120,000
公共上水道施設	2,650
自家発電施設	1,500
有線放送施設	1,000
合計	4,460,695

36・6梅雨前線集中豪雨災害犠牲者

この災害により次の方々が尊い犠牲者となられました。ここに謹んで哀悼の意を捧げ、その霊の安らかならんことをお祈りいたします。

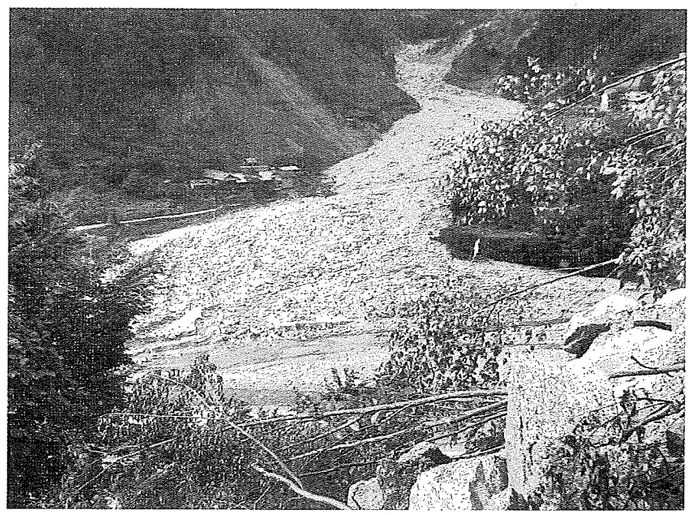
1．死亡確認者

自治会名	死亡月日	氏名	年齢	摘要
塩河	6.27	[redacted]		万塩沢川
西	〃			梅ノ木沢川崩落
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			寺沢川土石流
〃	〃			〃
〃	〃			〃
北川	〃			東小花沢川
文満	6.29			大西山大崩落
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
下市場	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃 下伊那郡喬木村
〃	〃			〃 飯田市上飯田
〃	〃			〃 伊那市東春近
〃	〃			〃 南佐久郡臼田町

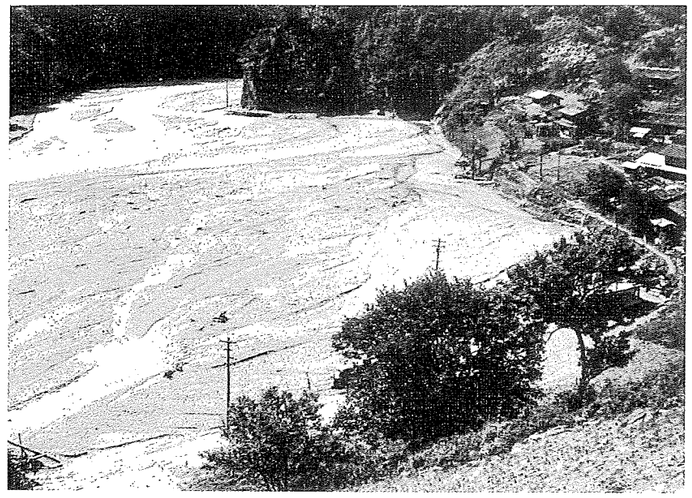
2．行方不明者

自治会名	不明となった月日	氏名	年齢	摘要
北川	6.27	[redacted]		東小花沢川
上蔵	〃			東小花沢川
下青木	6.29			大西山大崩落
文満	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
〃	〃			〃
中尾	〃			〃

災害の爪跡

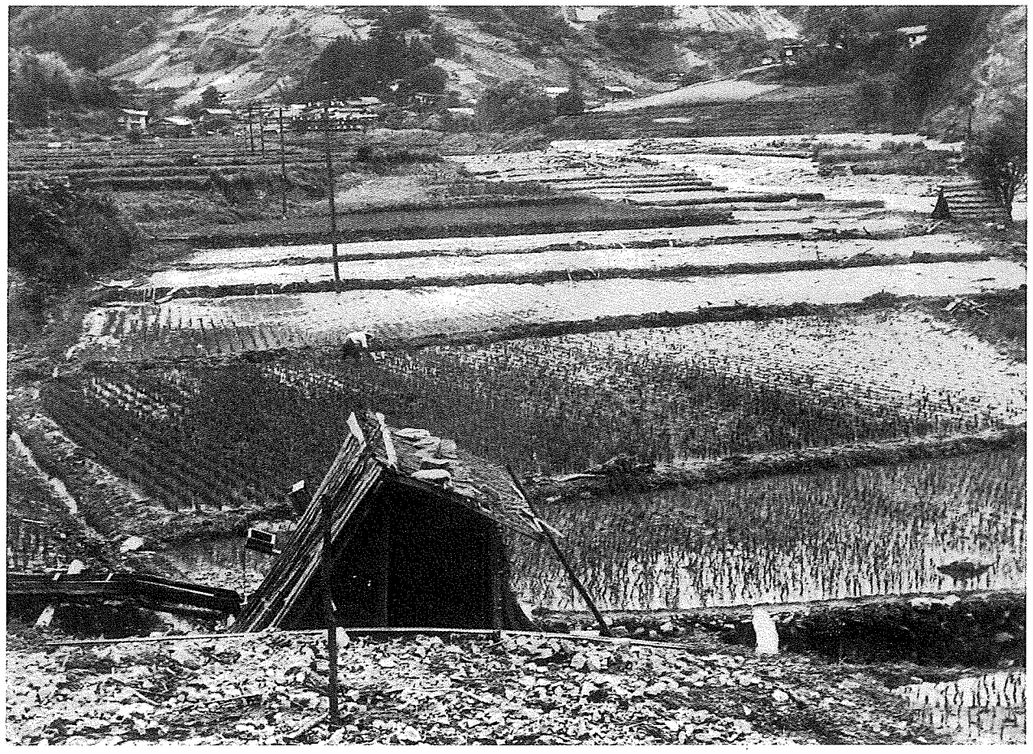


滝沢川

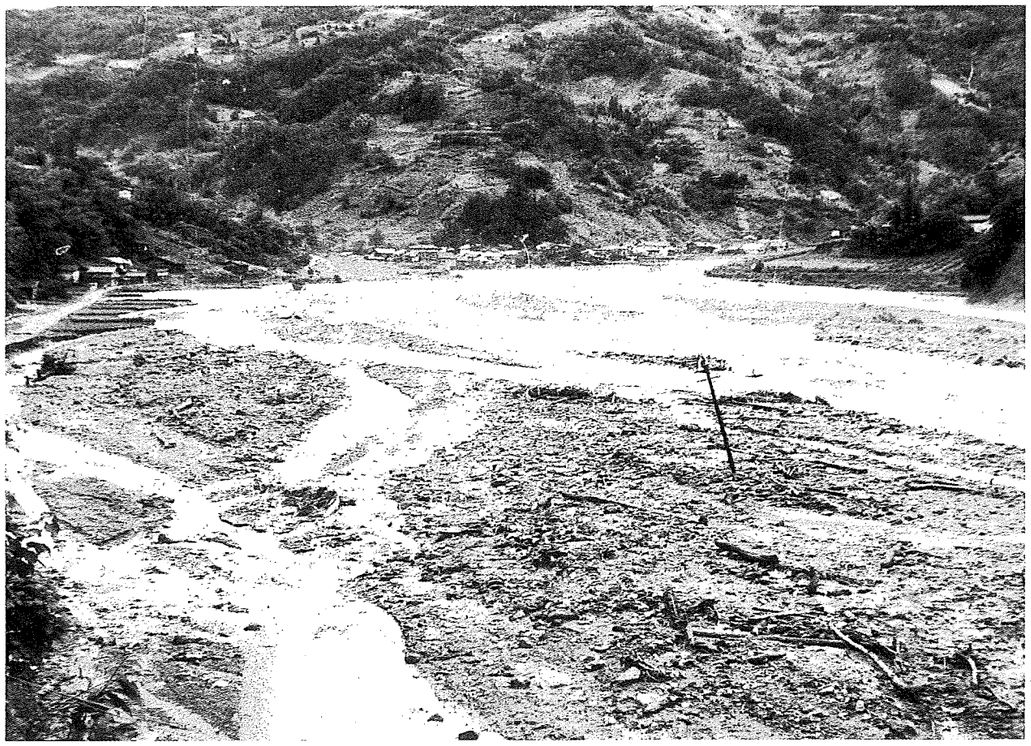


桶谷本村

落合



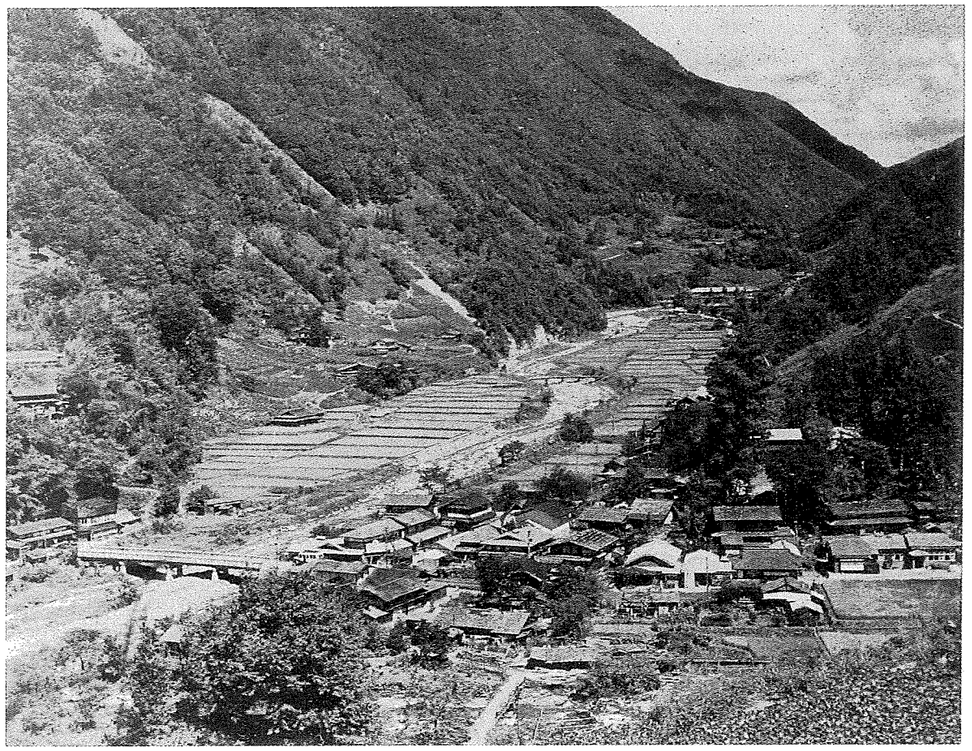
向田の被災前　（下原下方から鹿塩市場）



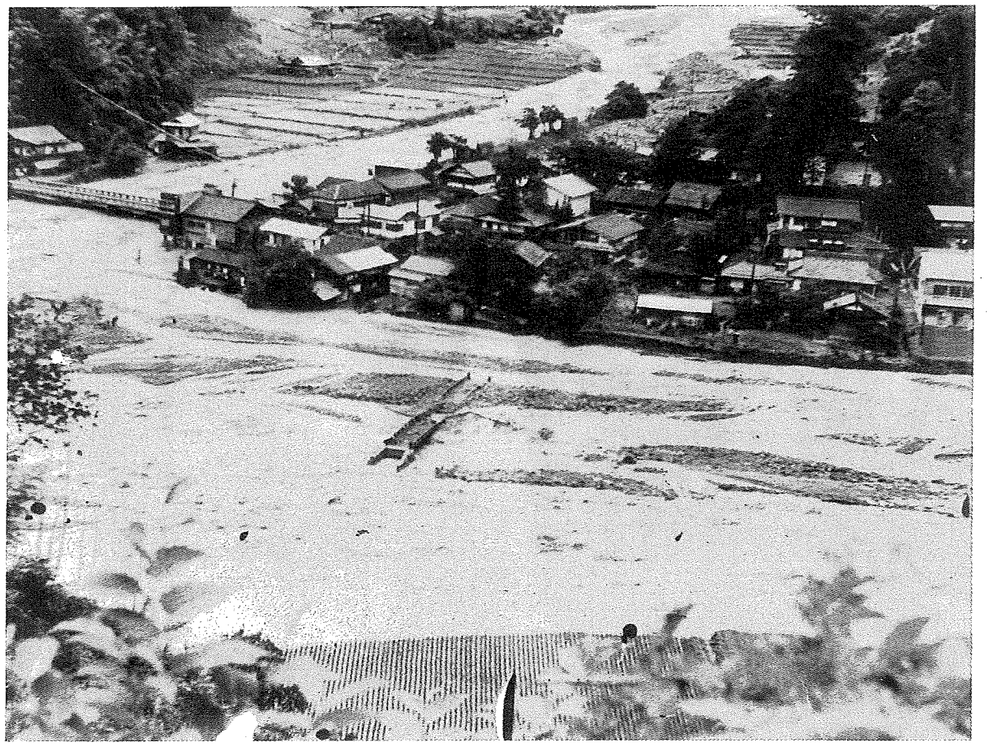
向田の災害

塩河向田方面（被災前）

塩河向田方面（被災状況）



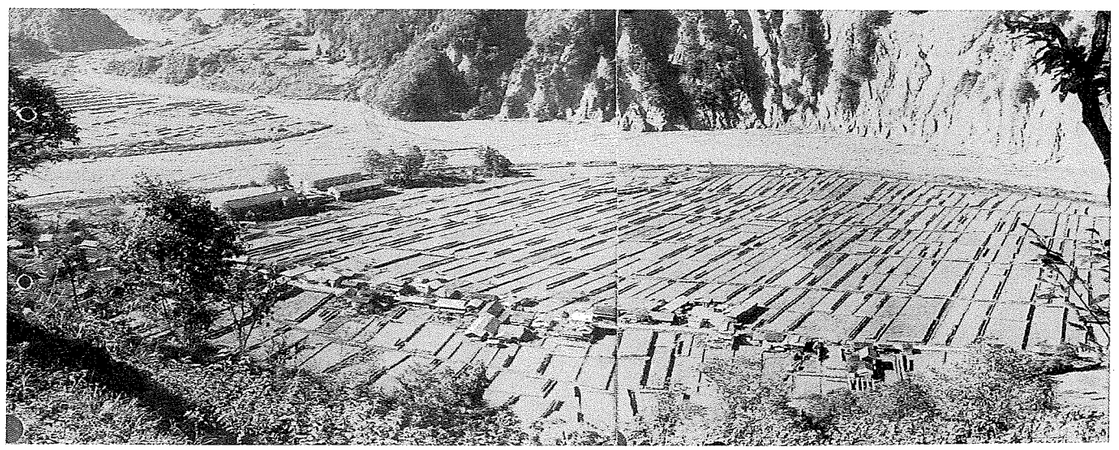
鹿塩市場　（被災前）



鹿塩市場　（被災拡大中）

みそゆるぎから北川分校

土石流により埋没した乗合バス（北川）



被災前の大河原　島河原一帯（S.33年）

被災前の文満前通り

昭和36年7月1日付けの「中部日本新聞」の紙面

中部日本新聞　昭1036年7月1日（土曜日）

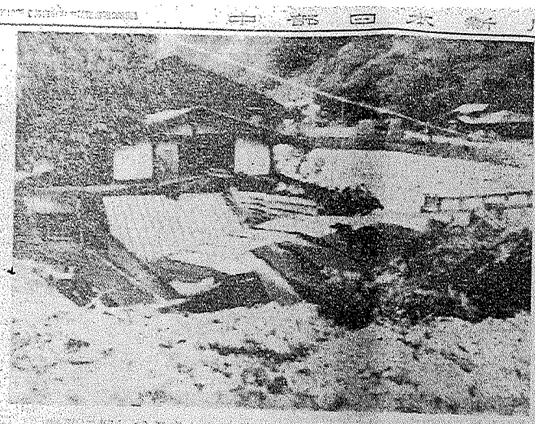
一瞬・死の村に

恐怖の大鹿村 山津波の惨状

大音響をとどろかせ

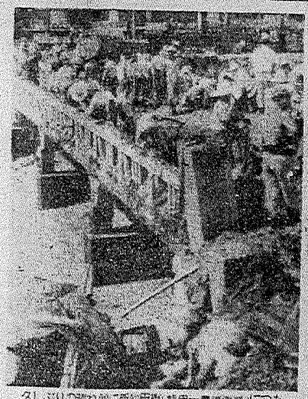
のしかかってきた赤土

続いてキバむく濁流



ヘリコプター墜落

災害救助物資積みすぎ



久しぶりの晴れ間に新飯田橋（飯田―豊橋通路）につもったドロを掘出て取りのける地元民たち

伊那の被害なお続く

高遠三千戸に避難指示

危険は一応去る

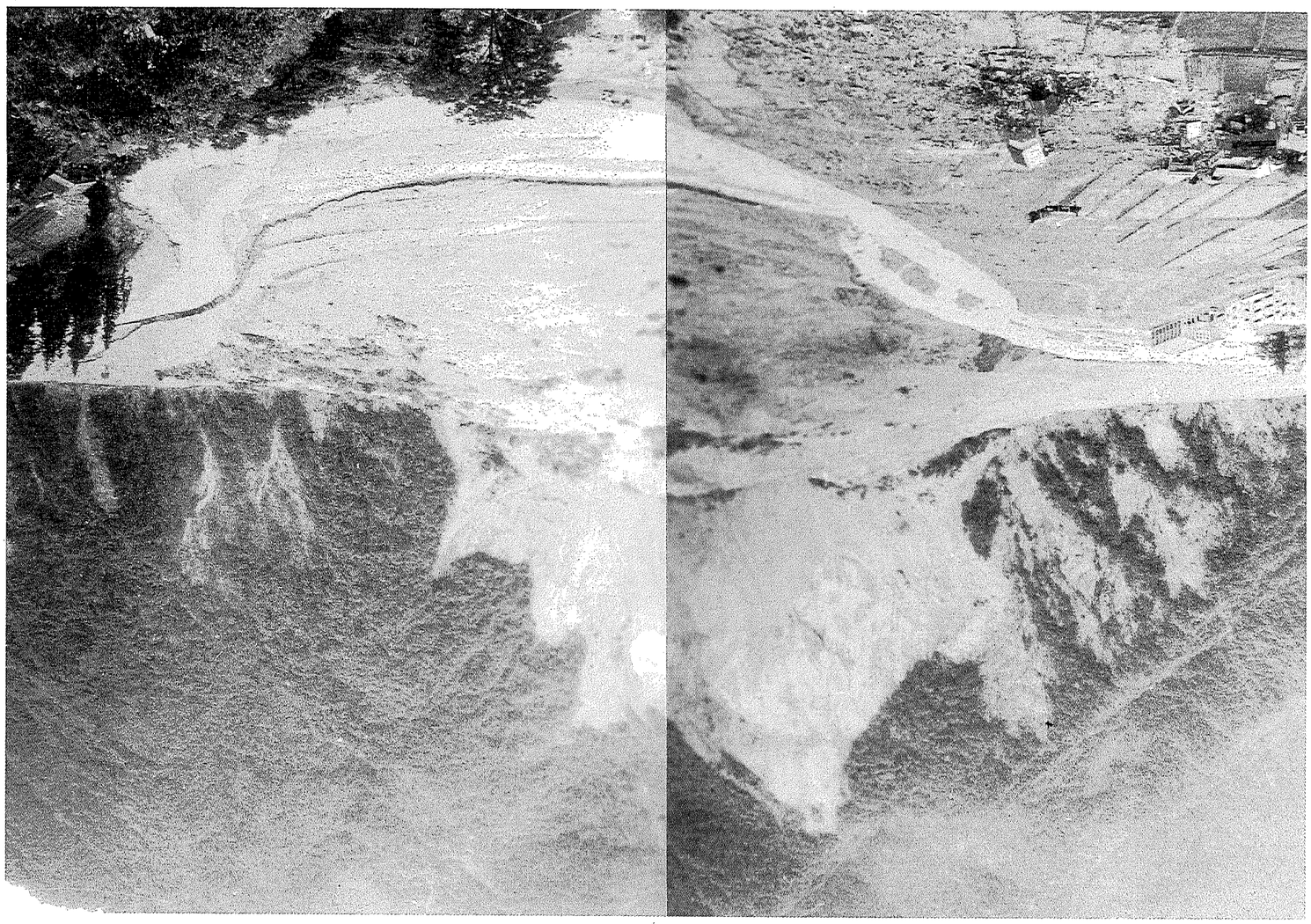
飯田地方 さっそく自衛隊出動

切れ切れの

泥にあえぐ南

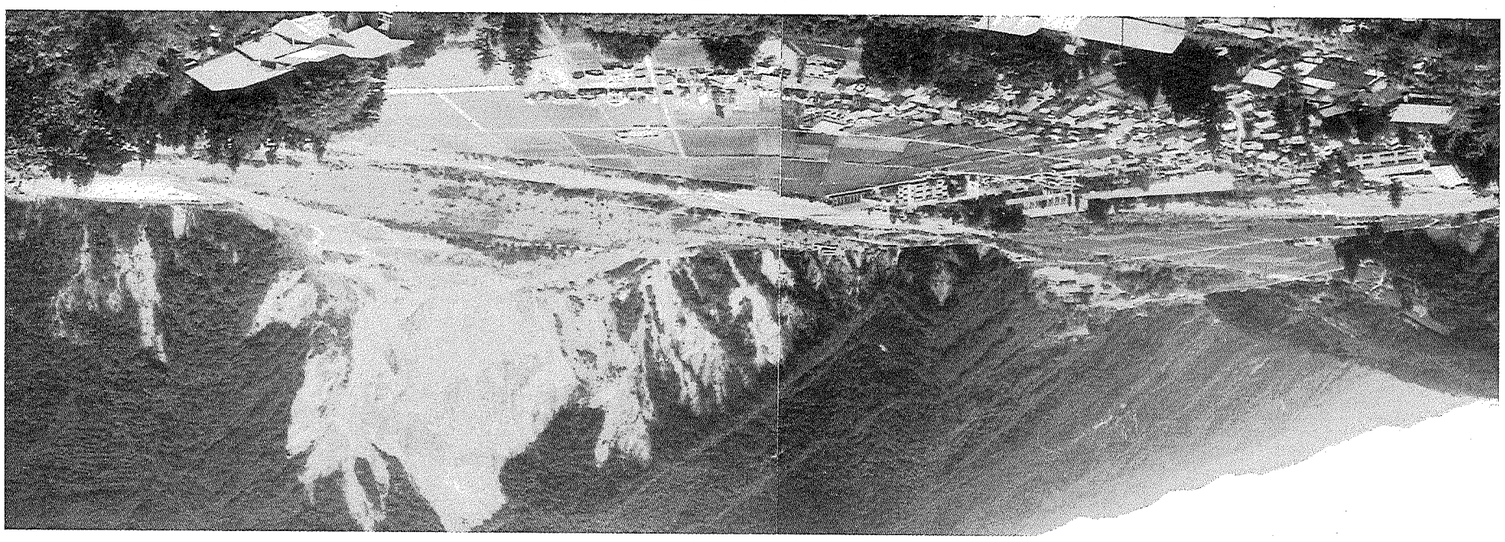
石川県に豪雨

大西山の大崩落

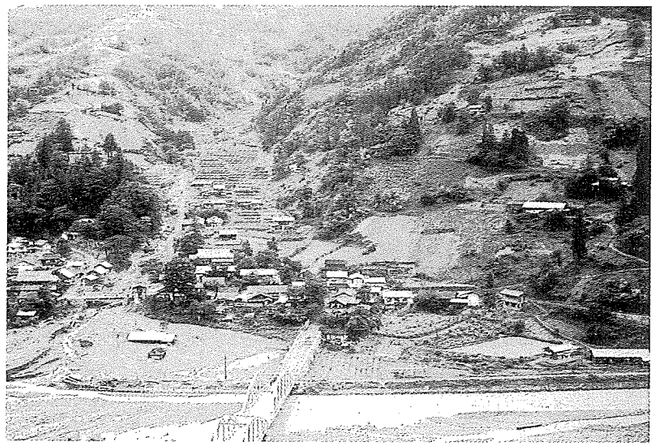


大鰐のモ西大

文満方面から見た惨状

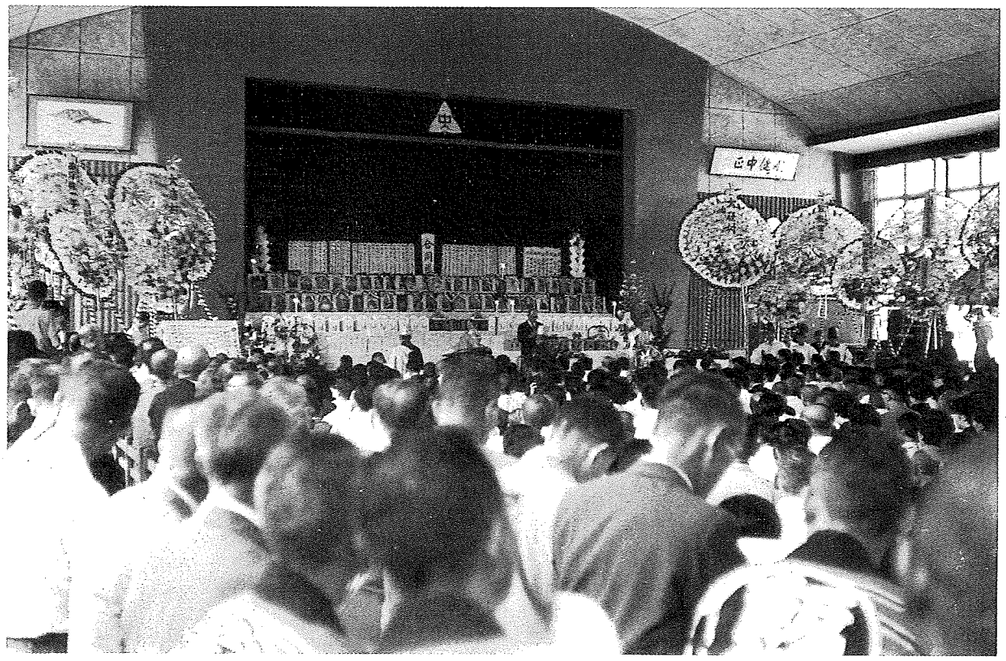


復旧途上の大西山



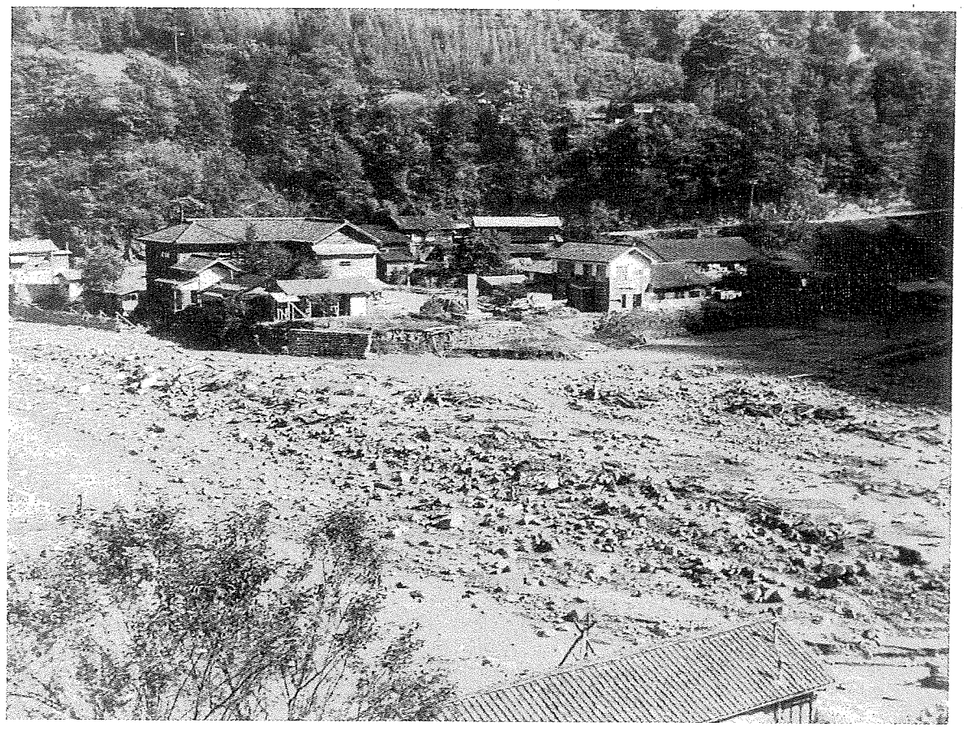
桐久保沢川の氾濫

桐久保沢川の氾濫で大河原中浸水

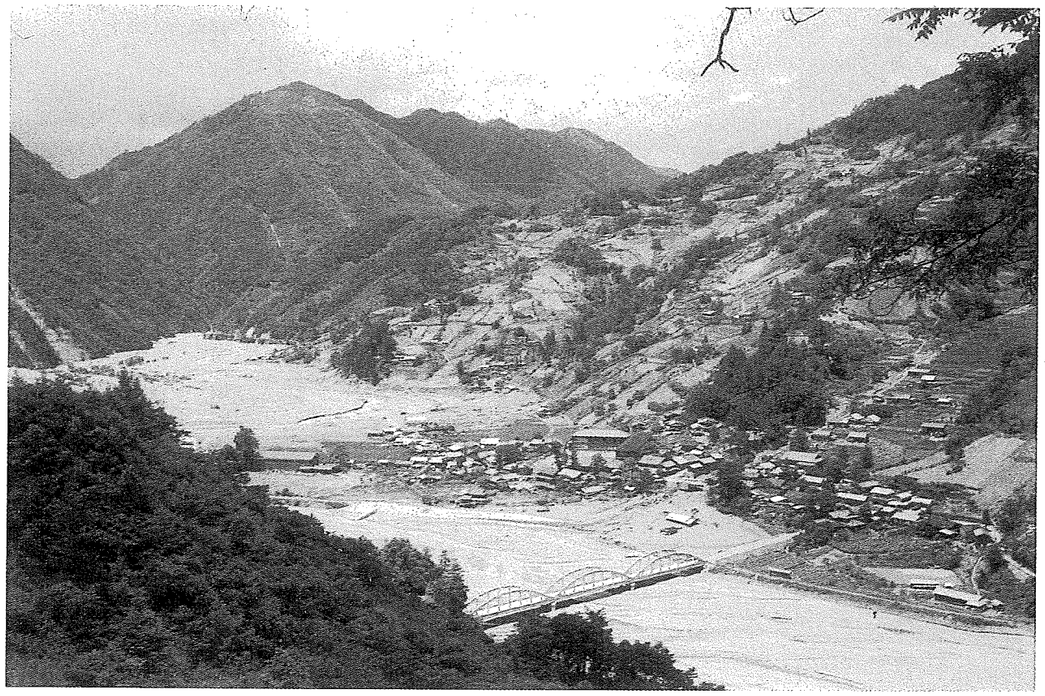


災害犠牲者合同葬　　於：大河原中学校体育館

大鹿村役場に設けられた災害対策本部



災害時の役場・診療所



大河原市場を中心に被災状況

行方不明者の捜索

現在の国道256号沿いの市場の様子

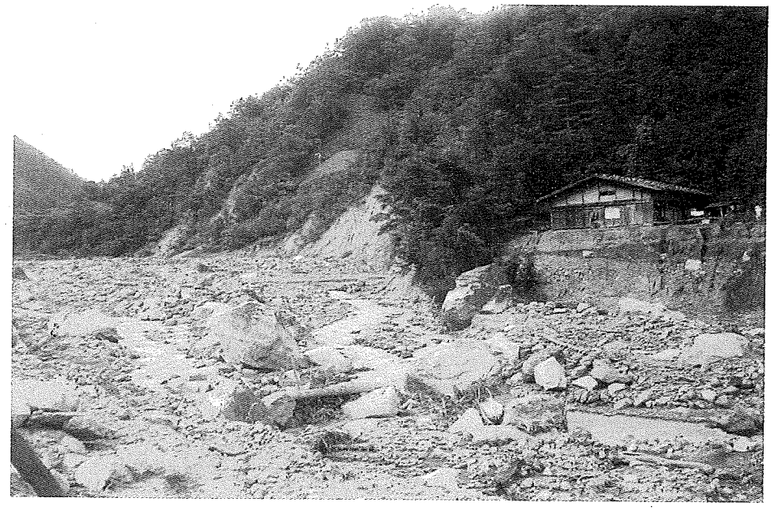
ヘリコプターによる春繭の出荷

救援物資の荷卸

鹿塩川と鹿塩市場の氾濫跡

鹿塩中学校体育館

土砂で埋まった鹿塩中学校体育館



大栗

北入分校

忘れえぬ36災害の記憶

36災の大鹿村 惨状の報告記

－災害救助要請派遣－

[redacted]記

36災害と聞いただけでぞっとする。あの恐ろしい災害の年からもう30年、思い起こせばあの年の６月20日頃から本州に梅雨前線が停滞しており、村を南北に縦断するように集中豪雨があり、降雨量も実に523ミリとなり、河川は急激に増水し山は崩れ、土石流となって荒れ狂い人や人家を呑み、まさに陸の孤島と化した。

そんな惨状の中６月29日の午前九時頃、大音響とともにあの大西山の大崩落により文満・下市場集落に山津波となって島河原の青田の泥を巻き上げ家屋の倒壊、流失、死者行方不明者42人もの犠牲者がでる大惨事が発生した。

当時私は、村役場に勤めていたので命を受け、この被災状況を伝え、救助を求めるべく、６月28日午前８時頃、他の職員４人と共に役場を出発した。後で知ったことだが、大西山の大崩落は、その翌日の29日に発生したのだ。28日私達は大河原から青木川を渡り、大西山の急な坂道を雨合羽と握り飯を背負い一歩一歩登って行った。

早く通報をしなければならないと思いながらも、一向に進まない。漸く頂上の唐松峠にたどりつき、村境を越えて豊丘村に入った。道はずたずたに切れ、森林の中に入れば方向が解らなくなってしまい、漸く探し当てて天竜川の方向へと歩いた。

休む暇もなく、歩きながら握り飯を食べ、時折降る雨、また雨で出る言葉も少ない。お互いに頑張れ！と励まし合いながら進んだ。起伏が多く、行けども行けども山また山、それにだんだん疲れが出て来て言葉も出ない。しかし村の惨状を知らせる任務の重大さを思い、互いに元気づけて一刻も早くしなければと歩きに歩いた。

夕刻時、大雨に見舞われ、雷が轟き近くに大きな音とともに落雷があり全員思わず地に伏せた。我々にも襲いかかる。恐ろしさに憤りを覚えつつ前進し漸く部落に出た。あちこちに被害が見える。更に暗い道を黙々と歩き続けて、出発してから延々12時間にて漸くたどり着いたのが豊丘村役場であった。職員の顔を見たとたん疲れがふき出し全身の力が抜けるようだった。時計は午後８時を回っていた。大鹿村の災害の状況を話し、一寸休憩してすぐ夜道を下伊那地方事務所へと歩き午後９時頃に着いて直ちに災害の状況を報告した。

次の日、災害救助のため、陸上自衛隊、警察機動隊、県の方々が大鹿村に救助に向ってくれた。道案内をしつつ松川町から大鹿村へと進んだ。先発隊は医療薬品、資材等を背負いつつ進む。その頃上空をヘリコプターが飛んで行った。漸く我々の連絡が実ったのだった。任務が終ったのだと思いつつ役場に帰って来た。

そして多くの方々の献身的な救助と、復旧作業によって、村は漸く活気を取り戻し、以降通信網は整備され砂防、治山事業が施されて災害復旧は進み村内の道路も整備されて来たのである。もう二度とあのような災害の起こらないことを願わずにはいられない。

水害をかえりみて

北　川　[redacted]記

忘れることのできない６月27日午後２時ごろ、私たち北川地区は一瞬にして河原となってしまいました。

猛烈に降り注ぐ雨に、川の水は一秒毎に水かさを増し危険状態になってきた。私たちは、まず学校にいる子供を迎えに行ってきたがもう学校の橋は水がつき、動き始めていた。やっとの思いで子供を連れもどし、近所の安全な家に避難させたときは、もう家の前まで本流がのり始めていました。突然、裏の小花沢は公民館を突破して鉄砲水は一度に私たちを恐怖に落としいれた。目の前に見える電柱、道路、堤防、向いの家、畑すべてのものをアッという間に押し流し本流はのり始め、いままでの姿はどこへやら、おそろしく荒れ狂う水をただどうしたらよいのかぶるぶるふるえて見守るよりいたしかたありませんでした。次の瞬間、濁流に乗ってふと目の前を、一人が大木にしがみつき、頭から泥まみれになった姿で手をふりながら流れ行く姿を見た。私は思わず「あっ人が、人が流れる。」ありったけの声をはりあげて家を夢中で飛び出し走ったが、次の瞬間もう濁流にまき込まれ、姿は見えなくなった。どうしたらよいのだろう。私は気ちがいのように叫びつづけた。家の中にはもう奥の間まで泥水が押し入ってきていた。もうだめだ。ただ逃げるのに夢中でした。家財道具、タンス、下駄箱、みんな水に押し流されて濁流へと流れて行きました。私は母と二人ではだしのまま裏山にかけ上った

もう何もいらない。家が流れてもよい。ただ生き残った私たちが無事でありますよう神様に祈りながら、裏山に立って荒れ狂う濁流をじっと見つめるばかりです。でも「仏様だけは出さなくては。」と主人は夢中で家の中に入り、やっとの思いで仏様を持ち出してきました。そのときはもう腰のところまで泥砂がはいっていました。頭からずぶぬれになり、山づたいに近所の家に避難した。もう近所の人たち70人くらいは一軒の家に集まっていた。上から下までびしょぬれの衣類を、皆着がえ一枚なく火をたいてかわかすよりしかたなかった。雨はしきりに強くなる。

誰も彼もただぼう然として荒れ狂う濁流をジーとみつめるだけで一言も語る人はなかった。夕方になってきた。雨はますます強く降り出し、石の流れる音ばかりが何か不気味に聞えるのでした。どの家も見てる間に次から次へと泥砂に埋っていく。また流れ去っていく。水しぶきをあげて鉄砲水がいくつとはなしに押し寄せてくる。私たちは互いにおそろしいおそろしいのあまり生きた心地はありませんでした。夜になってもう外は見えない。私はそばにいる子供を自分のそばに引き寄せ、親子一緒にどんなことがあっても離れまいと強く抱きしめた。おそろしい一夜は75人が一ところに寝るともなしに、ゴザの上に座り、夜を明かした。

朝になった。けれどどの家も影も形もない。ただ黒々とした濁流のみがにくらしげに谷のはしからはしまで一ぱいに広がって流れている。夜が明けきると、向うの山のふもとからも、こちらの山の峰からも、細々とした煙が立ちのぼるのが見えた。あっ、煙が見える、きっと雨の中でナイロン一枚で恐怖の一夜を明かしたのであろう。でも、皆無事でいるようだと安心したけれど、向うの方を見ると、ある母親がまだうまない桑ぐみを取っては子供に食べさせている姿が見える。あゝこうしてはいられない。私たちはむすびをにぎり、ロープを渡して握り飯を届けてやった。雨はまだやむけはいはない。避難所もまた危険状態になってきた。また、雨の中を私たちは小屋の材料を裏の山に運び、小屋をこしらえ、老人子どもを避難させた。私たちは一日の食糧のむすび２つでした。いまに、食糧も80人近い人では幾日も食べるだけはない。どうしたらよいのか、ただやむともなしに降りしきる雨をにらむばかりでした。

そんな30日朝、救いの神、北入消防団の方々が食糧を持って救助に見えたときは、ただ感謝で胸が一杯でした。続いて鹿塩分室からの救援も届き、ほんとうに生き返ったような気持ちでした。

次の日は朝日新聞社のヘリコプターがきた。北川部落はほかに連絡が取れず、これで終りになるのではないかと一時は考えたいま、私たちの頭上をヘリコプターが「皆さんしっかりして下さい。」といわんばかりの挨拶に、私たちは「どうか助けて下さい。ここにいます。お願いです。」と思いきり手を振りハンカチを振って叫び続けました。７月３日の日からは一日に何回となく食糧を医薬品をヘリコプターが、また病人をときてくださった。

私たちはこのうれしさはほんとうに一生忘れることはできません。

あれから４カ月余はたった。北川部落は一面の広い河原となってしまい、畑１枚、家をたてる安全な宅地すらなくなってしまいました。学校の校舎すらいまはあわれにも河原のまん中に流れ残った。一部の校舎の屋根が私たちを子供たちをむかしをしのばせ、痛々しげに泥砂に埋まって見えるばかりです。私たちはこれから先どう生きぬいたらよいのか、いまは一日一日を送るばかりです。けれど全国の皆様の温かいご同情により、一家これから来る寒い冬もなんとかきりぬけることはできると喜んでおります。これから先は村民お互いに手を取り合って助け合い、一日も早く幸福に生活できることを望むのであります。

大　西　山

文　満　[redacted]記

忘れることの出来ない大西山の崩落の日、６月29日の朝、一瞬にして住みよい平和なこの村を、私たちの生活を奪い去った災害は心身共に大きな痛手でした。

あの日も前日に続いて小雨模様でした。連日の水堰に体もすっかりつかれて、お宮に避難している人達もおなじだろうと思い、何日も出荷出来ない牛乳を持ってお宮へ上って行き、子供たちが大喜びで一杯ずつ飲みほした時、押しつけられたような大きな響き、皆総立ちとなり何だろうかと窓を開ければ、大西山の全部がこちらに向かって倒れて来るように見える。われ先にと飛び出して見れば否応なしに眼下に写し出されたのが、道端の家並が土砂に吹き上げられる光景でした。一瞬気を打たれて何の考えもなく、唯呆然と自分の視界を見て立っていただけでした。

しばらくしてはっと気づいた時、あゝ皆死んでしまったのか、年よりと子供だけお宮へ避難させていたこの子の母も、あの子の父も死に親はもう帰らないけれども、その時の自分は助かったのだとそのことだけでいっぱいで、せめてお宮にいた子供たちだけでも避難させようと、父母が無事に助かるようにと叫びながら、何でも高い所高い所まで上って行きました。

天災とはいえ、人が死ぬなんてこれ程みじめなことはありません。親のない子供、それを母親として自分に当てはめて見た時、目頭の熱くなるのは当然のことでした。もういやだ、二度と災害に遭いたくない、人の命まで取る災害を、これを人の力で何とか食い止めれないものかと思います。ほんとうに自然の力には勝てないものか、それに勝って再び平和な暮し、良い生活が一日も早く訪れてくれる日をと、それのみ願っております。

白い雨の恐怖

塩河　[redacted]記

６月23日から降り出した雨は、だんだんと川幅を広げてゆく。24日二階に上って外を見て「白い雨だなー」と思った。嫁いで来て初めて植えた田が見える。田仕事が終ってほっとしたところなのに家の田は、赤ナギの前で一段低い所にある。おじいさんも心配して何度も見に行って来ていた。降りつづく雨は、ます屋の前の畑も川にしてしまった。

27日はすごい雨の中、堤防に立って近所の人達と川を見ていた。北川で人が流されたとの話も聞こえてきた。その内に小島の橋かと思われるものが橋の形のまま流れて来た。これはえらい事になったと思った。昼すぎ元扇屋のおじいさんの家と細沢の家があぶないということで、近所の人達と荷物を扇屋の映画館へ運んだ。その時、ます屋のおじいさんもいた。そこへ西の男の人がおじいさんをさがして来て「字原がすごい水で松尾屋の前の橋があぶないから針金を持って来てほしい」と言って来た。おじいさんは、すぐに登って行った。その時がおじいさんを見た最後になったのだ。

少しして私は家に来て外にいた時だった。「ゴー」とものすごい音がしたので、下忠の方を見ると、

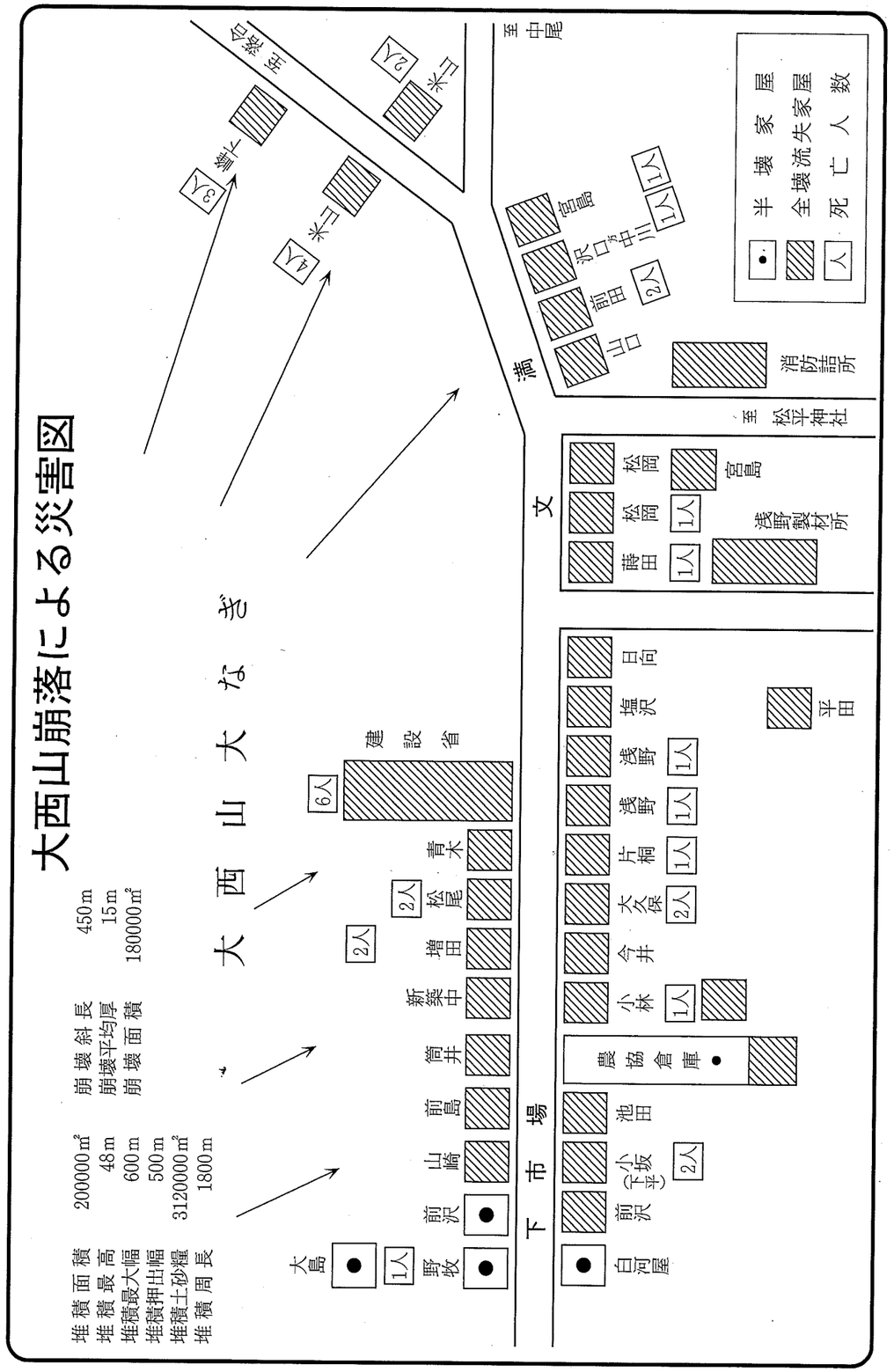
下忠の家よりも家の前の桐の木よりも上を大きな茶というか黒いようなかたまりの中に棒が出たものが川の方へとんで行った。おばあさんが下忠が心配だと言って歩き出したので私も走ってゆくと、あの大きな家の裏から土砂が入って玄関の戸をおしたおして流れ出していた。初姉さんが土砂を踏んで出てきて「紀子が二階にいる」と言った。紀ちゃんは下におりられずにいると営林局の人が「受けてやるからとびおりろ！」と言った。すぐとびおりて無事だったけど、皆でます屋のおじいさんがいない、誰がいないと、大さわぎになった。あのかたまりと一緒に流されてしまったのだ。そして下忠のおじさんがいない事に気がついてさがしたが結局、松建の方にいて助かって良かった。人をさがす人達、泣いている人、なんだか身体がふるえて仕方なかった。

その後、紀ちゃんと北川の小松の息子を預っていたので寺平へあずけて、婦人会の人達で白木屋へたき出しに行っていると、消防の人達が来て「芳屋もあぶないで荷物を出すように」と言われた。皆で家のタンスや布団等を万屋で運んでもらった。この時、鹿塩橋にもう水がついていてこの分だと市場が全部やられてしまうから爆破した方が良くはないかなんて話も出ていた。その後、夫は飯田へ出張していないので、おばあさんと二人で公会堂へ避難した。さいしょの内は花やの人達と少なかったのにだんだん皆が避難して来て荷物とで一杯になってしまった。おじいさんは、この家を動かんと言っていたが消防の人達とおそくに上ってきた。この時はもう道路は水が流れていて、やっと越して来たそうだ。消防の人達が来る度に、どこどこがやられた、あの人がどうのの話。

駒瀬の人達が新谷にいて全員流されたとか、小さい子供の泣き声はするけどあぶなくて助けられないとか、おそろしいのと、かわいそうなで皆泣いた。その夜は雨の音、川の音でただせまい公会堂のすみに横になったけど、いつ自分の頭の上にもあの黒いかたまりが落ちてくるかと不安でねむれなかった。夜１時頃だったか「ゴー」とものすごい音がした。朝夜明けと共に皆で外に出てみて驚いた。私は神社の庭で見たけれど、自分の目を疑った。昨日まであった下忠がない。大丸屋も北林も松建も、あるのはただ砂と石の山。向田から下島にかけて田はほとんどない、ただ河原、下島の所にあったおおきな柳の木も一本もない。なんということだろう。家はというと農協の倉庫のおかげと、家の下に元鹿塩橋の堤防のおかげで家の下半分を川がながれていたのが、床上浸水にならずに良かった。

その後29日の大西山の崩落で、大勢の人が亡くなった。その中に姉と姪がいようとは。鹿塩がひどいと聞いて、私の事ばかり心配してくれたというのに。

さっきまでそばで働いていた人が、あっという間に帰らぬ人となる。また一家の大黒柱を失ってしまう。このおそろしい災害が二度と起こらないようにと祈るばかりである。



写真御協力

倉田重光氏

大久保智夫氏

手記御協力

[redacted]

御協力ありがとうございました。

参考資料

大鹿村誌（中巻）

災害復興記録

昭和36年梅雨前線集中豪雨災害30周年記念誌

平成4年3月　印刷
平成4年3月　発行

編集　大鹿村

発行　大鹿村役場
〒399－35　長野県下伊那郡大鹿村大河原
TEL　0265－39－2001

印刷所　株式会社　興文社印刷
〒395　飯田市馬場町2－576番地
TEL　0265－22－2107

飯田市立中央図書館蔵書